美術の窓(69)

古代古典美術の成立 —飛鳥・白鳳・天平〔7〕白鳳彫刻—人間の自覚

大和文華館館長 吉川逸治

飛鳥から白鳳へ 七世紀の後半、美術史上、白鳳という美しい名で呼びならわされた時代の彫刻は、推古朝以来の北魏様式や南梁様式の存続するものと、新たに導入された斉周様式や隋様式・初唐様式が併存して、じつに活気にあふれた古典様式を創造しようという時代だった。

法隆寺金堂の釈迦三尊から百済観音、中宮寺の弥勒と眺めてくると、もう若々しい人間像が現われて、そのさきの発展が一歩一歩予想されるようだ。夢違観音・香薬師・深大寺の釈迦と愛すべき仏像があり、天武十三年(685)に開眼された山田寺の本尊(興福寺蔵)、同じ年の当麻寺の弥勒本尊と順序よくならんで、薬師寺東院堂の聖観音、金堂の薬師三尊にいたり、余韻は橘夫人厨子の三尊像までつづく。人間の自覚が一作ごとに明らかになり、自信を強めてゆくので、ギリシア彫刻でいうなら後期古拙様式から原古典期にいたる発展が思いだされる。

中宮寺の弥勒の衣襞の知的なさばきは、深大寺の釈迦の衣襞線を予想させる。深大寺の像は、また新しい襞線を提示するが、どこかちぐはぐなところがある。

山田寺の本尊が仏頭しか残らないのは残念であるが、すばらしい肉付きの顔面をしている。単純な面のようでいて微妙な起伏をもち、生き生きとしたその顔は、香薬師から興福寺の十大弟子までの発展の系列の中間に入ってくる。脇侍の日光・月光はもっと新しい試みで、薬師寺金堂の脇侍菩薩を予告する。

当麻寺の本尊は、新しい柔軟な技巧で、堂々たる厚味と起伏のある体軀をして、衣襞も自然な柔らかい波をうって、台座から大きく布端を垂れさがらせている。顔がまじめな威厳ある表情をとって、仏像に求める精神内容が古典的威厳に近づいたのを感じる。事実、台座も類似しているので、当麻の弥勒は薬師寺の薬師本尊を思わせる。

木殿の本薬師寺のために作られた薬師三尊は、まことに天武朝にふさわしい豪壮な気迫に満ちた像で、いかにも威厳ある古典像の理想を実現している(持統二年(688)または文武二年(698)までの作)。しかし、優美な古典像からはほど遠い。ここでは、まだ人間心理の多様性とか機微は問題ではない。力の表現、威力の表現が問題なので、この点はまだ止利の安居院の釈迦像の伝統がそのまま続いているのを感じる。

薬師寺聖観音 まず薬師寺東院堂の聖観音から見よう。金堂の薬師三尊像とともに、日本彫刻の最高傑作であるのみならず、世界の彫刻史上の傑作である。堂々たるヴォリュームをもって人間存在を主張し、かつ精神の純潔さを全身にみなぎらせている。厚味ある体軀にふさわしい弾力性のある面の推移を与えながら、しかも肉体性はおさえて抽象化の形式を与え、精神性を高揚する。新式の瓔珞を頸につけ、腰にさげ、顔は大きな目を細目に開き、波形をなす両眼瞼の間から瞳をのぞかせ、インド流の優しい表情を威厳のある相貌に加える。このような柔軟な細部をひきしめて、直立する像は、左右相称的に大きくゆるやかに起伏する面で全体を整え、衣襞も左右相称的な幾何学形を作って、古拙様式を思わせるさわやかな大小のリズムを生んでいる。

薬師三尊 金堂の薬師三尊像にいたっては、小林剛氏のいわれるように、まさに白鳳芸術の絶頂である。聖観音のように慎み、躊躇することなく、積極的に豪勢な人間像を主張して、力と豊かさに満ちあふれている。薬師も日光・月光も、現世の支配者としての美しい威厳をもち、その堂々たる体軀は古代ギリシアの成熟した古典期の青銅像を思わせるが、しかもこれらにはない森厳な精神表現を備えている。

聖観音 薬師寺東院堂

日光・月光は、聖観音と比べるとよくこの円満な肉体表現がわかる。これら両脇侍が両脚を支脚と遊脚にわけて腰を突きだし、静止態の全身にゆるやかな動勢を与えるというのは、紀元前五世紀以来のギリシア古典的人間像の伝統的規則であって、胸・上腹部・下腹部と三区分にトルソを組み立てる古典デッサンとともに、よくこれらを学びとって、みごとな古典形態を作っている。

インドも中国も、もちろんガンダーラのギリシア式仏教美術によって、ギリシアの古典的人体像を学んだ。そして、インドらしい偉大な官能的神秘性をさずけ、あるいは中国らしい雄大な肉体的現実性を主張した。これらに比べると薬師三尊像は、法隆寺金堂の壁画と同じく形式主義で、線・面・形とそれらの律動的均衡に執着しており、より象徴性に近づいている。三像の豊満な顔の目・鼻・口唇を刻む鋭い線や、髪・瓔珞のていねいなデッサンなど、細かい線条で大きな面や量塊をひきしめている。衣襞もことに本尊のものが流麗で、かつ白鳳らしい簡潔さと幾何学的衣襞法の伝統をみごとに活用している。正しく秩序だてられた人間の力の完全性ということに自信をもっているという形像であって、まさに厳格なる古典美の典型である。

(筆者著書『日本の美術1 日本美術入門』監修/亀井勝一郎・高橋誠一郎・田中一松、1966、再版1980年、平凡社、より

本書の英訳本〝Major Themes in Japanese Art〟translated by Armins Nikovskis, 1976, Weatherhill, New York)

季刊 美のたより No.125
平成10年11月13日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.